

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2013.03) 平成23年度:48-49.

一事例からのスピリチュアルペインの分析
～積極的治療の中止後も治りたいと訴えた患者の事例を通して～

織田裕子、藤井幸恵

一事例からのスピリチュアルペインの分析 ～積極的治療の中止後も治りたいと訴えた患者の事例を通して～

5階東ナースステーション ○織田 裕子、藤井 幸恵

【はじめに】

スピリチュアルペインとは、人が人生の危機に直面し人生の意味や目的を見失うときに生じる様々な苦痛・苦悩であるといわれているが、その概念は多様である。村田はスピリチュアルペインを「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」¹⁾と定義し、時間存在、関係存在、自律存在の3次元からスピリチュアルペインを理解しケアの指針を示している²⁾。

A氏は、がんの完治を目指し治療に取り組んできたが、治療効果がみられず積極的な治療が中止された。その後も「治りたい」という訴えがあり神に助けを求める発言も聞かれた。A氏と共に身体的・心理社会的な問題について話し合いケアしたが、A氏の反応の真意を理解し受けとめていくということについては意図的に関わるのが難しかった。今回、A氏の家族の承諾を得てスピリチュアルペインの視点からA氏の反応を分析し、実践したケアの意味を振り返る。

【方法】

A氏の反応と実践したケアを治療や身体状態の変化に応じて3つの時期に分類し、村田のスピリチュアルケア理論を用いてその意味を分析する。この際、個人が特定されないよう情報の提示方法を工夫しプライバシーを保護する。

【結果】

1. 事例紹介

A氏は70歳代の女性であった。病気に負けないと積極的に化学療法を受けていた。元教員で海外旅行が生きがいであった。独身であったが妹のサポートが得られていた。

2. 看護の実際

1) 積極的治療が中止された時期

X日化学療法目的で入院したが、効果がなく積極的治療が中止された。「治りたい」「自分なりの方法で頑張る」「昔ノートルダム寺院で大司教様に話しかけられた。きっと守られている」「頑張るから」と繰り返し発言し、民間療法を試していた。看護師は目標に向かっ

て行動を起こすことがA氏のコーピングであると考え、患者の意欲から現実的な目標を達成できるよう関わった。外泊を考えていたA氏に、意志決定できるよう調整し、共に準備するといったケアを行った。

2) 身体症状が悪化した時期

呼吸苦や倦怠感が出現し日常生活への支障も出始め酸素や麻薬等の薬物が使用された。「治してください」とマリア像の写真に祈り、「夜は暗くて辛い」と言い朝を迎えると安心した表情がみられた。死の不安が生じていると考え、訪室を多くし傾聴した。また、「歩くと気持ちいい」と散歩を楽しみにし、「管は人格を否定される」とトイレへ行くことを希望した。A氏の希望を尊重し方法を工夫して散歩を行いトイレまでの歩行を介助した。

3) 身体状態が悪化しナースコールが頻回になった時期

倦怠感や呼吸苦が増強し麻薬の持続注入が開始された。「神様助けて」「また来てくれるよね」と言い夜になると表情が硬くなった。「何もなくていい」と体位交換は拒否したが看護師がベッドサイドにいることを望み、ナースコールを握りしめていた。症状が増悪するとナースコールが頻回となり「助けて」「ただただ側にいてほしい」とうわごとのように繰り返した。死の不安や孤独感が増強していると考えベッドサイドに付き添った。手を握って側にいると安心した表情で入眠していた。X+107日、家族に見守られ永眠された。

【考察】

1) 積極的治療が中止された時期

A氏のコーピングをふまえ、外泊に向けて共に準備し具現化することは、A氏の自律性を維持するケアとなった。しかし、これは本人の表層にある希望にそった目標達成をしていたことであった。A氏の「頑張る」という言葉は、以前のように治るために頑張るということだけではなく、頑張るという言葉によって居場所を求め、存在価値や意味を看護師に問うと同時にA氏自身が自問していたのではないかと考えられる。また、積極的治療の中止は、自己コントロール感を失う経験であり、物理的

な時間の限界を意識せざるを得ない状況となりスピリチュアルペインが生じていたと考えられる。

2) 身体症状が悪化した時期

身体的苦痛があったが身体状態に合わせて共に散歩に行き、また、排泄についてA氏の意向を尊重し、トイレまでの歩行ができるよう介助した。身体症状がある中でもA氏の希望する方法で基本的なニードを満たすことを目指し、苦痛を最小限にする方法を考え実施していったことはA氏の意志決定を尊重することであり自律性を守る事につながった。

3) 身体状態が悪化しナースコールが頻回になった時期

A氏は看護師が側にいることを強く望んだ。身体状態の悪化により死を意識し、スピリチュアルペインがさらに強まっていたと考えられる。A氏の言葉を手がかりにベッドサイドにいと安心してのように眠る様子があった。A氏の側に寄り添っていたことは単に安心感を与えたということだけではなく、関係性の柱を太くするという意

味を持っていた。

【結論】

1. 積極的治療に意欲的な患者は、治療中止によって自己コントロール感を失い、物理的な人生時間の限界を意識することからスピリチュアルペインが生じていた。
2. 身体的苦痛が増強する時期は、苦痛の軽減と意志決定を尊重することが自律性を守ることにつながった。
3. 患者は、自分の死が迫っていることを意識すると、看護師がそばにいることを求め、寄り添うことが関係性の柱を太くするという意味があった。

【引用文献】

- 1) 村田久行：終末期患者のスピリチュアルペインとそのケアー現象学的アプローチによる解明ー。緩和ケア 15(5):385-390,2005
- 2) 前掲書 1)